

愈々江戸に入る。千住の関所を前にミチはふっと息を吐いた。

関所は大勢の人や馬でごった返していた。大声で呼び交わす人声に馬のいななきが重なって騒然としている。

手続きに手間取るのだから、そう覚悟を決めて手形を差し出したところ、何を確認することもなく通された。

ミチは余りの呆気なさに思わず役人の顔を見た。すると顔を見られた役人も、何ゆえ人の顔を見る、というふうにミチを見返したが、それだけだった。

千住の橋を渡りきった所で職人らしい男に道を尋ねた。両腕を組んで通りから川沿いの道に曲がろうとするとところだった。道の先には茶店らしい暖簾が見えている。

「下谷徒士町？何て家だい。野村安長つて、御家人のかい？俳諧の偉え先生だろ。知つてるとも。安長知らなきやもぐりでごあんちよ、てなもんだい。どうせしまでい、連れてつてやらあ。」

「島なのですか？」

「そうさ。今日は頼んどいた材料がへえらねえんでしまなんだ。付いて来な」

ミチはどこか釈然としないまま男のあとを付いて歩き始めた。すると男が続けた。

「ところで尼さんは何処から来なすつたい？長州？毛利さんの長州かい？そうかい、毛利さんもとんだ芋を引いちまったもんだな、あんな隅っこに追いやられちまってよ。徳川の殿様とは喧嘩をしませんて、約束してたんだからその通りにしてりや良かったんだよ。そうすりやあ今でも西の大名でいられたものをよ」

男の舌は滑らかだった。一匹狼の下駄職人で大店の注文品を作っている、と言った。

「俺を鍛えてくれたのは左助という渡り職人だったけど、腕はよかつたなあ。胸を患つててよ、先が無えかも知れねえからつて、三年かけて俺を鍛えてくれたのさ。半年前えに亡くなった時にや三日三晩泣き通したぜ。辛かつたよ。いい加減に世の中を暮してた俺を一人前えにしてくれたんだもん。え？訛りかい？そう言われりや時々北陸訛りが出たなあ」

ミチは目を見張つて男を見た。山中で世話になつたちえが、加賀の小松で別れたという佐助のことに違いない、と思つた。

佐助は、小松でちえを置き去りにしたまま江戸に向かつたのだ。その佐助の消息を江戸に入るなり知ることになるうとは。

全く予想をしていないことが突然起こる不思議を、見えないう糸で操られているとしか思えない偶然を、高まる興奮を抑えきれずミチは男に畳みかけた。

「その佐助さんて人、越前小松の人ではありませんか？」

「そうさ、越前小松の出だと言つてた。国に母親が一人残つていても言つてたなあ。しきりに会いたがつてたが、訳があつて帰れないとも言つてた。何でいく、尼さんは親方の知り合いかい？」

今度は逆に男が驚いた。

「墓？墓は今から行く野村安長の近くに隆源寺てえのがあつて、そこに、立派じゃねえが、今の俺が出来る最高の墓を建てさせてもらった。俺にとつちや掛け替えのねえ恩人だもんな」そう言つて男は少しはにかんだ。

「ここが野村安長さんの屋敷だ。今日はよかつた。しまだつたから尼さんに会えた。親方の話も出来た。その、ちえさんでえ人にも親方のこと知らせてやつてくんねえか」

男はそう言つと、軽く片手を挙げて別れの合図を送り、ミチに背を向け、来た道に戻つて行つた。

野村安長は俳号を道元といつた。下駄職人の男が言つたように、近在では俳諧美濃派の宗匠としてつとに知られていた。おとないを入れると、三、四歳ぐらいの女の子が小走りに出て来て、きちんと両手を床につくと、はつきりとした言葉で「いらつしやいませ」と言い、小さな顔を上げてにっこりほほ笑んだ。

続いて姿を現わした母親らしい女は、細面にくつきりとした目鼻立ちの顔に優しい笑顔を浮かべ「菊車さんですよね」と言つた。

驚いた表情のミチに被せるように

「傘狂先生からのお手紙でお着きになる日を、今日か明日かとお待ちしていました。さあさあ堅苦しい挨拶は抜きにしましょう。どうぞお上がりになつて」

いきなり菊車さん、と呼ばれて面食らつたミチだった。その上、ミチの返事を待つ前に歓迎の言葉である。

呆氣に取られているミチの手を女の子が引いて

「どうじよ」と言つた。

江戸の初日は関所を通る時から予想が外れる幕開けとなつた。これほど簡単に関所を通つたのは、美濃を出発して今日まで、初めての出来事だった。

道を尋ねた男からは、全く偶然に山中のちえに伝えたい佐助の消息をもらった。幸先の良い出だしにミチの心はずんだ。

草津の追分で、やがて行く江戸の方角を透かして見た時に、にわかを訪れた胸のざわめきを今でも鮮明に覚えている。

その江戸に、日本をおおかた半周してたつた今着いた。

長府を出て一年半、美濃を出て八ヶ月に及ぶ長旅だった。叫びだしたい衝動をそつと楽しんだ。